

# ビワ生育情報

第 6 報  
千葉県農林水産部  
令和3年3月号

本年は1月以降最低気温が $-3^{\circ}\text{C}$ を下回る日がなかったため、寒害の発生は少ない。  
開花盛期が早かったことと、開花盛期後の平均気温が高めに推移したことから、幼果の大きさは平年よりも大きい。

## 1 令和3年2月の気象

令和3年2月の半旬別の気象を表1に示した。平均気温は第6半旬を除き平年よりも高く推移し、特に第3及び第5半旬は気温が高かった。月平均気温は $9.2^{\circ}\text{C}$ で、平年より $2.9^{\circ}\text{C}$ 、前年より $0.2^{\circ}\text{C}$ 高かった。

氷点下日数は5日であった。最低極温は第2、第4、第6半旬は平年より低く、それ以外は平年よりも高かった。2月28日の $-2.2^{\circ}\text{C}$ が最も低かった。

降水量は第3半旬にまとまった雨量があったものの、それ以外はほとんどなかった。月合計は67mmで平年の80%、前年の131%であった。

日照時間は第1、第2、第4、第5半旬は平年より多く、第3半旬は平年並み、第6半旬は少なかった。月合計は199時間で平年の131%、前年の120%であった。

表1 令和3年2月の気象(暖地園芸研究所)

半旬	平均気温 ( $^{\circ}\text{C}$ )			氷点下日数 (日)			最低極温 ( $^{\circ}\text{C}$ ) <sup>*1</sup>		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
1	8.2	5.2	8.9	1	1.9	0	-0.5	-1.6	2.7
2	7.6	6.4	4.3	1	1.6	4	-1.4	-1.2	-3.0
3	11.3	6.6	11.7	0	1.6	0	3.4	-1.3	2.1
4	8.2	6.2	10.0	2	1.4	0	-1.0	-0.6	0.8
5	12.4	6.8	11.0	0	1.1	0	3.6	-0.3	2.5
6	6.4	7.1	7.9	1	0.6	0	-2.2	1.0	2.0
平均/計	9.2	6.3	9.0	5	8.1	4	-2.2	-2.6 <sup>*2</sup>	-3.0

※1：本年及び前年は各半旬に記録した最低気温を示し、平年値は過去30年の平均値

※2：2月中に記録した最低極温の30年間平均値

半旬	降水量 (mm)			日照時間 (hr)		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年
1	4	10	0	35	29	33
2	0	10	0	41	28	32
3	63	14	22	27	27	21
4	0	18	10	40	26	29
5	0	20	6	46	26	37
6	1	12	15	10	15	14
平均/計	67	84	51	199	152	166

## 2 幼果の寒害、果房及び樹の発育(4月の作業は次ページ)

3月1日時点のビワ幼果の生存率を表2に示した。樹冠外側の生存率は「楠」及び「田中」は100%、「大房」は93%で、平年及び前年よりも高かった。樹冠内側の生存率も「楠」及び「田中」は100%、「大房」は96%で、平年及び前年よりも高かった。ビワ幼果の寒

害は-3℃に2時間以上遭遇した場合に発生しやすいことが知られており、暖地園芸研究所では、1月以降-3℃を下回る日がなかったため、発生が少なかったと考えられる。

果房内の幼果数は平年並みである。本年の開花盛期は3品種とも平年よりも早く、その後の平均気温は高めに推移したため、幼果の大きさは平年よりも大きい。果実の肥大が進むと擦れ傷、虫害などを被りやすくなるので、摘果・袋かけ作業は幼果の状態を確認しながら早目に進める。萌芽の展葉も平年より早く進んでいる。

本年の果樹カメムシ類の越冬量は、南房総市他県南地域で中発生と予測されており、今後の発生予察情報を参考にする。また、カメムシの発生が例年多い園では、4月以降、ビワ園への飛来に注意を要し、千葉県農作物病害虫雑草防除指針に従って防除を行う。

**表2 ビワ幼果の生存率（暖地園芸研究所）**

品種	樹冠の外側(%)			樹冠の内側(%)			内外の平均(%)		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
楠	100	64	41	100	91	80	100	77	61
大房	93	81	52	98	94	79	96	87	65
田中	100	78	30	100	94	81	100	86	56

調査日：「楠」及び「田中」令和3年3月3日

「大房」は令和3年3月10日

平年：平成10年～令和2年の23年間の平均

### 3 4月の作業

4月になると平均気温が一段と高くなって枝葉・根ともに伸長が盛んな時期になり、果実の肥大も急速に進む。3月に続き、摘果・袋かけが重要な作業になる。

#### (1) 摘果・袋かけ

本年は寒害が少ないが、平坦地のように寒害を受けやすい園では、幼果の生死の判別が容易になる頃から摘果を始める。果形が細長いもの、果実肥大が均一でないもの、果皮に張りが無いものは被害果の可能性が高い。被害果の発生が多い園では、樹冠の外側の幼果は避け、被害が比較的少ない樹冠の内側の幼果を多く残すようにし、収量低下を抑える。一方、本年は果実の発育は平年より早く進んでいるため、作業可能な園から順次取りかかる。

#### (2) がんしゅ病の予防

千葉県農作物病害虫雑草防除指針に従って、幼果期までに銅剤を予防散布する。その際、幹や枝にも薬液が十分にかかるようにする。

#### (3) 除草

春草が繁茂する時期になるので、収穫が始まる前に除草を済ませる。草生栽培園では、有機物を補給する意味で草を刈り取って樹冠の回りに敷くとよいが、労力の足りない場合は除草剤を利用する。

なお、表の数値は、表示単位未満を四捨五入したため、合計値と内訳の計が一致しない場合がある。

【問合せ先：千葉県農林総合研究センター暖地園芸研究所特産果樹研究室

電話 0470-22-2961】

※果樹の生育情報は「ちばの農林水産業」の「生育情報」でも御覧いただけます。

<http://www.pref.chiba.lg.jp/seisan/seiiku/index.html>